

弁護士鈴木信雄と近代地域社会（3）

橋 本 誠 一

目 次

はじめに——研究の視点

第一章 青少年期の鈴木信雄——弁護士試験合格までの歩み

第二章 大正期の静岡県在野法曹界

第三章 三百屋と会則改正問題（以上、第五卷三・四号）

第四章 人権蹂躪問題と陪審裁判（以上、第六卷一号）

第五章 青年弁護士の政治活動と静岡市会への進出（以上、本号）

第六章 静岡県会での議員活動

むすび

第五章 青年弁護士の政治活動と静岡市会への進出

(1) 松浦五兵衛、立憲政友会静岡岳南少壮団、そして国本社静岡支部

すでに述べたように、信雄の父・伝七は松浦五兵衛代議士の傘下に入り、政友会に所属していた。信雄も、進学を夢見て上京した折に松浦を訪ねて以来、何かにつけて松浦の後援を得ていた。弁護士試験に合格し岡崎伊勢蔵事務所に入った後も、松浦とのつながりは深いものがあった。信雄にとって「松浦は畢生の大恩人でもあったので、彼が静岡に来て、大東館に止宿すると、いつもその傘下に馳せ参じては、いろいろの雑用を果していた。松浦の方でも、若い鈴木には、何かと頼みよいと見えて、いつも秘書的役割を命じていた」という。⁽¹⁾

ところで、岡崎伊勢蔵はかつて松浦五兵衛らの懇請を受けて東京から掛川そして静岡に転住し、松浦とともに政友会系の立場で活動していた。しかし、その後、いかなる事情があったのか不明だが、岡崎は政友会と袂を分かち、一九二一年(大正一〇)年には反政友会系新聞社・静岡民友新聞の社長に就任していた。つまり、松浦は自らの秘蔵っ子ともいべき青年弁護士を、長年の知己とはいいいながら、今や党派の立場を異にする人物に預けたのである。その当然の結果として、信雄は、所属事務所の経営者である岡崎の活動に——「心ならずも」という面もあったとは思いますが——協力せざるを得ない立場に立たされた。実際、信雄は静岡民友新聞の編集にも関わり、たとえば紙上での法律相談を担当した。また、同社主催の借家人同盟の発会式(一九三三年三月三〇日開催)にも参加し、弁護士⁽²⁾の立場から「法律上から見た借家人の地位」と題する演説を行った(ただ、同盟会の役員には名を連ねなかった)。

しかし、信雄はあくまで松浦五兵衛の傘下であり、政友会の人脈に連なる人間であった。それだけに、岡崎と松浦との

間に立つて、両者の軋轢に悩まされることもあったのではないかと推測される。こうした矛盾を解消し、名実ともに松浦の傘下に入るきっかけとなったのは、一九二四（大正二三）年、政友会分裂に連動して起こった「静岡新報社事件」⁽³⁾であった。この事件後、岡崎伊勢蔵事務所を離れて独立開業（一九二四年一〇月）⁽⁴⁾した信雄は、静岡新報社（政友会系新聞社）の幹部社員を務めるなど、公然と政友会の活動に参加することになったのである。⁽⁵⁾

その過程で誕生したのが「立憲政友会静岡岳南少壮団」であった。静岡岳南少壮団はいわば政友会静岡市支部の青年組織として一九二七（昭和二年）に設立された。設立当時の状況について村本喜代作は次のように語っている。すなわち、

鈴木が静岡新報の社員になった頃、同社を中心として、静岡政友少壮団が誕生した。元来、日本の政党は、大正の初期から、昭和の初期にかけて約十年、政党の弊害が頂点に達して、国民の間に喧しく論議されたため、これに反発する血気の青年達が、各地に政友少壮団又は憲政少壮団を結成、院外活動を行なって政界刷新を叫んだ。大正九年五月、原敬内閣の下で、小選挙区制の総選挙が行なわれた時、志太郡下で政友会の巨頭杉山四五郎の金権選挙に対抗して、憲政会の鈴木富士弥を推した志太憲政少壮団が、理想選挙の旗印をかけて、見事にこの大敵を破り、日本政治史の上に不朽の名声を挙げてから、少壮団の存在は大きく浮び上って来た。静岡新報事件で、毎日新報社に出入している内に、鈴木は政治運動の好きな青年達に擁立されて、静岡政友少壮団の団長に推された。鈴木の下には、原田丑蔵、奥村重吉、鶴来甲子雄、榊原孝次郎、内藤敬三、杉山孝七などがいた。元々政治をやって世の中のために働け、と父から訓えられていた鈴木のことであるから、この少壮団長は、私財を抛って団員の拡大に努め、忽ち静岡市内に於いては一大勢力と化した。⁽⁶⁾

村本が述べているように、信雄を団長とする静岡岳南少壮団は、積極的に青年層を組織化し、一九二九（昭和四）年には

会員数二〇〇名余を数えるまでに発展した。⁽⁷⁾ 信雄は、同年四月に団長の職を退いたが、⁽⁸⁾ その後も岳南少壮団と密接な関係を保ち続けた。このように、政友会系の青年層を組織化し、自らその団長となって積極的に党勢拡大に努力する——これが青年弁護士・鈴木信雄のもう一つの「顔」であった。そして、後に見るように、こうした活動が、信雄の地方政界進出の強力な足場となるのである。

ところで、若き鈴木信雄と政治との関わりを語るとき、国家主義的団体・国本社との関係を見逃すことはできないだろう。一九二四(大正一三)年五月、司法界の大立者で国粹主義者として知られる平沼騏一郎が中心となって、「国本ヲ固クシ国体ノ精華ヲ顕揚」することを目的に国本社が創立された。これに呼応して、翌年以後、静岡県内でも支部組織の確立が相次いだ。そのうち、もっとも早く支部組織を確立したのは、一九二五(大正一四)年設立の静岡支部であった⁽⁹⁾ (ただ、残念ながら、その詳細は不明な点が多い)。信雄はこの国本社静岡支部の活動に当初から参加していたと推測される。

静岡県内での国本社の活動は大きな広がりをもって展開された。現在判明する限りで、静岡県内での(静岡支部以外の)支部設立状況は次の通りである。

- 一九二五年二月二〇日 志太郡支部発会式⁽¹⁰⁾
- 一九二六年 四月一八日 浜松支部発会式⁽¹¹⁾
- 四月二六日 清水支部創立準備委員会開会⁽¹²⁾
- 六月 五日 沼津支部創立總會⁽¹³⁾
- 六月二九日 安倍支部発会式⁽¹⁴⁾

このうち浜松支部は、四月一八日午前一〇時から、浜松市元城町国光館において千名余りの参加者を得て発会式を挙

し、評議員二名を選出している。評議員の主な顔ぶれをみると、静岡地方裁判所浜松支部判事、静岡地方裁判所検事局浜松支部検事、浜松警察署長、浜松師範学校長、陸海軍人、日本楽器社長など官界・財界人が並ぶ外、在野法曹界からは高柳寛太郎、井上剛一、小竹禄之助、村松茂友、佐藤章次の各弁護士が名を連ねている。⁽¹⁵⁾地域社会の有力者を網羅したといえる陣容だが、その中でもとりわけ司法関係者の比重の高さが顕著である。平沼の呼びかけで作られただけに、地方法曹界が積極的に呼応し組織作りに協力していた様子がうかがわれる。

おそらく静岡支部の組織も、浜松支部のそれと同様に、司法関係者を中心に地方の官界・財界等の有力者を多く動員していたと思われる。残念ながら、信雄がこの支部組織の中でどのような位置を占め、どのような活動を行っていたのかという点についてはほとんど資料が残っていない。唯一の資料として村本喜代作の証言があるのみである。それを次に引用しよう。

鈴木は、法曹人の関係から、平沼騏一郎のひきいる国本社 of 有力な会員だった。然も同じ国本社関係で知り合っていた塩原時三郎が、大正十三年二十八才の青年局長として静岡郵便局に赴任して来た。(略)鈴木と塩原とは、主義も思想も共通していたので、兩人は忽ち肝胆相照して刎頸の交を結んだが、折柄突発した浜松の楽器争議に対しても、俱に手をとって起ち上がった。当時の静岡地裁の検事正は、三家重三郎のあとをうけて、山下寛次郎がその任に就いていたが、楽器争議の双方が過激なビラを撒いて猛烈な宣伝戦を行ない、それがために市民大衆に夥しい不安を与えるので、双方に厳しく戒告して、一切ビラの撒布を禁止した。然し鈴木と塩原は、楽器争議の紛糾度が加重するに従って、労働者側が毎日革命歌を唄って氣勢をあげていると聞き、今は早や捨て置くべき時期でないと、止むに止まれぬ義憤から、この山下検事正の戒告を無視し「国賊を追ひ払え」「治安を破壊する逆賊を葬れ」などと、言々句々、熱血に燃ゆるビラを書いて、これを暮夜ひそかに静岡新報社の輪転機で印刷し、裁断機にかけて約八万枚の宣伝ビラを

作製、窃かに天野辰夫と打合せて浜松に運び、静岡から風呂敷に包んで鈴木と塩原が持参すると、天野が待受けていて、自動車で浜松全市にバラまいた。⁽¹⁷⁾

村本によれば、信雄は、国本社による「上からの組織化」の流れに雷同して会員になったというよりも、国本社の国粋主義的理念に積極的に賛同し、社会的実践を通してその普及・浸透を図ろうとする人物であったようである。興味深いことに、村本は、信雄のそうした強い思想性と実践性の一例として、浜松市で闘われた日本楽器争議(一九二六年四月二六日、八月八日)への積極的な関与を指摘している。⁽¹⁸⁾

日本楽器争議では、地元の大石力弁護士らが争議団メンバーの弁護を数多く引き受けた。⁽¹⁹⁾また東京からは自由法曹団の会員弁護士(上村進、布施辰治など)が浜松市を訪れ、争議団の支援活動に熱心に取り組んでいた。⁽²⁰⁾これに対して、信雄が国粋主義的な立場から争議団を批判・攻撃していたという事実は、当時の彼が労働運動に対して敵対的立場に立っていたことを示すものとして興味深いものがある。とりわけ信雄の場合、戦前・戦後を通じて人権蹂躪問題に熱心に取り組んだ弁護士というイメージが強いだけに、「検事止の制止を振り切ってまでも争議団攻撃のピラづくりに励む」⁽²¹⁾という信雄の姿は多くの人に意外の感を与えるかもしれない。⁽²²⁾

(2) 静岡市会選挙への立候補

時代は大正から昭和へと移った。それとともに、信雄の身辺にも大きな転機が訪れる。一九二九(昭和四)年一月、静岡市安西の茶商・吉川寛次郎⁽²³⁾が信雄を自宅に訪ね、来るべき市会議員選挙において「信雄の選挙運動のために事務長を引き受

けたい」という意向を伝えた。⁽²⁴⁾ 信雄に対する立候補の要請である。親族の中には消極的な意見もあったようだが、結局、信雄は要請を受け、政友会から立候補することを決意した。そして、三月二〇日、静岡市会議員選挙が告示され、ここに有権者数約二万二〇〇〇人、議員定数三六をめぐる選挙戦が開始された。この選挙は、静岡市会議員選挙として初めての普通選挙であり、しかも豊田村（一九二八年一〇月）、大里村・安東村（一九二九年四月）の隣接三ヶ村を合併して八万都市から一二万都市への拡大を遂げた直後の選挙であるという点でもとりわけ重要な意味を持つものであった。そこで次に、信雄の立候補の模様を伝える新聞記事を掲げておこう。⁽²⁵⁾

大静岡市建設の第一步を踏み出した最初の市会議員選挙の幕が切って落とされた昨日（三月二〇日——引用者）の静岡市役所は、吏員が大忙しで手分けをして赤、青、黄、紫、緑、樺の六色に分けられた有権者入場票二万一千九百五十八枚を該当番号と有権者姓名を対照してゐた。夕刊所報後の昨日供託金を納付して立候補の手続を了した者は左記の八氏にして、合計十三名となった。

△下桶屋町 弁護士 鈴木 信雄（推薦者吉川寛次郎）

△大 岩 銀行員 望月 七平（本人）

△七間町 浴場業 小長井誠蔵（推薦者広瀬修造他二名）

△鷹匠町 新聞記者 三浦宅治郎（本人）

△東鷹匠町 会社員 根本 昇（推薦者山下銀蔵）

△八番町 指物製造業 竹下菊次郎（本人）

△日之出町 土木建築請負業 田中太次郎（推薦者梅原定吉）

この記事にあるように、信雄は、三月二〇日、吉川寛次郎を推薦者として立候補の届出を済ませ、四月一〇日の投票日を目指して選挙戦に突入した。なお、立候補届出の受付は四月四日まで行われ、最終的に六四名の候補者が出揃った。⁽²⁶⁾。それでは信雄は、どのような政見を持って選挙戦に臨んだのであろうか。『静岡新報』一九二九年三月三〇日付の記事は次のように報じている。

候補者中の最年少組で、本年三十二歳だが、御商売の弁護士では既に一流の域に入って居て、先輩古参者諸君、親子ほどの違ふ方々と肩を並べたり、一足御先へ失敬したりして居る。平素は写真で御覧の如く一寸瞑想家的な沈着味を持った貴公子であるが、法廷に立って弁論をやる時などは、舌端火を吐く如き熱弁を振ふ。市議出馬も自己の信念から出馬したのだと言って居るが、同町内どころかすぐ隣から民政党の渡辺隆蔵君が出て居るので、なかなか苦戦ですヨ、と大に警戒して全市に戦線を延長して行く。政見としては、

静岡市が種々の大事業を控へて居るに拘らず財政計画を持って居ないのは遺憾である

と言ふ所から、財政大調査会の設置から戸数割賦課率改正、都計(都市計画のこと——引用者)受益者負担の公平、教員の待遇改善、電燈料金の統制問題等をか、けて居る。

財政政策(市財政計画立案を目的とする財政調査会の設置)、地方税制(戸数割賦課率改正)、都市計画事業(受益者負担の公平化)、教育行政(教員の待遇改善)、市営公共事業(電燈料金統制問題)など多方面にわたる政見が打ち出されている。ただ、その多くは当時の一般的な政策課題であり、鈴木信雄に固有の政見というものでは必ずしもなかった。

次に選挙運動体制について見てみよう。鈴木信雄陣営で選挙実務の中心を担う事務長に茶商・吉川寛次郎が座ったことはすでに言及したところである。さらにそれを周囲で支えたのはどのような人々であったのか。立会演説会来援者の顔ぶ

れから、それを窺ってみよう。(27)

鈴木信雄君 二十九日午後六時から市内七間町入道館に於て開会、弁士は岳南少壮団野口△静岡新報野中△浜松市会議員大石△井浪、加藤両県議の外に婦人毎日新聞編輯長婦選獲得同盟山根きく子女史も来援する筈。

これによれば、来援者は政友会所属県会議員（井浪、加藤）、同浜松市会議員（大石力弁護士）、静岡新報編集長（野中芳蔵）、静岡岳南少壮団（野口）、そして山根きく子女史（婦人毎日新聞編集長・婦選獲得同盟）という顔ぶれであった。政友会からの組織的挺子入れ（県会議員や静岡新報編集長）や個人的な繋がりによる支援者（大石力弁護士や岳南少壮団）のほかに、わざわざ婦選獲得同盟の山根かず子が来援しているのが注目される。しかし、残念ながら、信雄と婦選運動との間にどのような人的繋がりがあったのかまったく不明である。

それでは、実際の選挙運動はどのように行われたのか。選挙終了後、『静岡新報』一九二九年四月一日付は、二〇日間に及ぶ選挙戦の総括を行った。これによれば、六四名の候補者全体で四〇〇回の演説会（一人平均約六・三回）が開催され、四二万枚に及ぶ文書（一人平均約六五三枚）が配布されたという。その内訳を候補者別に見ると、信雄は通算一八回の演説会を開催し、七九五〇枚の文書を配布した。演説会の開催数では、唯一の無産政党候補・松田辰雄が一回で第一位を占め、信雄はそれに次いで第二位であった。文書配布数では、第一位の候補者は二万三三〇〇枚を、第二位は二万二五〇〇枚をそれぞれ配布した。これに対し、信雄は——松田辰雄と同様に——下位グループに位置した。つまり、全体的傾向から言えば、信雄は演説会中心の選挙運動を展開し、より多額の経費を要する文書配布にはさほど力を入れていなかったようである。なお、各候補者は、選挙に要した費用について選挙後の届出を義務づけられており、その結果は「静岡県公報」に告示された。それによれば、信雄の選挙費用は二四〇円八五銭であった。ちなみに、候補者全員の平均は二二九円三三

錢であつた。⁽²⁸⁾

かくして迎えた四月一〇日投票の結果、信雄は四五〇票を獲得し、定員三六名中一位で見事当選を果たした。⁽²⁹⁾党派別に見れば、政友会九名、民政党五名、中立二一名（うち二名は準政友系、その他は水曜会、無産政党一名という構成となり、また新人二六名、現職九名、元職一名という内訳であつた。

（3）静岡市会議員としての活動

支 部 長	松浦五兵衛
副支部長	松城兵作、山口忠五郎
総務委員	松本君平、倉元要一、庄司良朗 大橋亦兵衛、郡谷照一郎、山下久二 勝又国臣、佐野歟太郎、鈴木辰次郎 中村四郎兵衛、吉田勇吉、森和一
幹 事 長	宮本雄一郎
会計監督	鈴木与平
常任幹事	広田伝一、真野喜久平、秋山忠平 大塚甚之助、平野睦則、金原暁一 佐藤章次
顧 問	松永安彦、堀内半三郎、大野久次 沢田寧、高林市蔵、白松六治郎 原保太郎、宮崎友太郎、池田猪三次
幹 事	依田四郎（賀茂郡）、小沢孝三（富士郡） 池田茂太郎（安部郡）、平野睦則（磐田郡） 太田賢治郎（田方郡）、原栄作（庵原郡） 加藤利八（志太郡）、田辺三郎平（周智郡） 堀内喜代作（駿東郡）、鈴木与平（清水市） 中島茂光（榛原郡）、鈴木六郎（浜名郡） 真野喜久平（沼津市）、中西惣三郎（静岡市） 榛葉幸蔵（志太郡）、佐藤章次（浜松市）、加藤類次郎（引佐郡）
評 議 員 (抄)	△清水市 鈴木与平、坂上政次郎 江川政太郎 △静岡市 鈴木信雄、水谷団治

はじめに、静岡市会議員に当選したことによって、政友会静岡県支部の中での信雄の政治的地位がどのように変化したのかを見ておこう。静岡県支部は、一九二九（昭和四）年二月、支部大会を開催し、

新しい役員体制を決定した(表①参照)。(30)これによれば、信雄は、同期で静岡市会議員に当選した同業者(弁護士)の水谷団治とともに、政友会静岡県支部役員組織の末端(評議員)を占めることになったのである。

次に、静岡市域での信雄の政治的地位を見てみよう。政友会静岡市支部会は、一九三一(昭和六)年三月七日、部会を開

表 ②

支 部 長	松本君平
総 務	石上庄太郎、水谷団治 鈴木信雄、中西惣三郎 野中芳蔵、服部勇吉 渡辺隆蔵、山口千代吉
幹 事 長	川島一松
会計監督	小出岩太郎
常任幹事	竹下千代蔵、大石森太郎 大石 泰、鶴来甲子雄 奥村重吉
幹 事	大村幸太郎、花見正雄 大橋甲一、青島良蔵 天野克巳、太田清次郎 杉山幸七、原田丑蔵 鈴木恭平、榊原幸次郎 松本厚、松本金作
幹 事	松城兵作、宮本雄一郎 寺崎乙治郎、井浪茂三郎
相談相手	(一二名略)

画(三〇年五月安倍川市宮発電水利権許可)、上下水道敷設事業(三〇年一月上水道事業工事着工)、市営バス事業(三〇年四月静岡国道市営バス許可)、都市計画事業(二八年三月市会、都市計画街路事業予算を決議、二九年四月第一期都市計画街路事業起工)、市役所新庁舎建設問題(三四年一〇月新庁舎落成)⁽³²⁾などの重要課題を抱え、歴史的な発展期を迎えようとしていた。そうした政治状況の中で、信雄がどのように活動したのかを検討するのがここでの課題である。

市会議員の政治活動は、市会本会議・市会全員協議会・参事会(信雄は一九三〇年五月参事会員に選出された)などの市会内で

弁護士鈴木信雄と近代地域社会(3)

催し、党則の改正と新しい役員体制を決定した(表②参照)。(31)これにより、信雄は、静岡支部組織の幹部役員の地位に就いたのである。それでは次に、実際の議員活動について検討してみよう。鈴木信雄が静岡市会で議員活動を展開したのは、一九二九(昭和四)年四月から三三(昭和八)年四月までの四年間であった。この時期の静岡市政は、周辺町村との合併促進(二八年一〇月豊田村、二九年四月大里村・安東村、三三年四月駿機村、三四年一〇月千代田村・麻機村・大谷村・久能村・長田村を合併)、発電所建設計

の活動と市会外での政治活動とに分けることができるが、資料的には、本会議は『静岡市会議事速記録』で、全員協議会は当時の新聞記事である程度追跡することが可能である。参事会については静岡市役所行政課法務文書室に關係資料が保管されているとのことであったが、今回は閲覧・利用することができなかった。市会外の活動についてももっぱら新聞記事に頼ることになる。そうした限られた資料から信雄の市会議員としての政治活動の全体像に迫ることはなほ困難である。そこで本稿では、いくつかの特徴点を指摘するにとどめざるをえない。

実は、『静岡市会議事速記録』を見る限り、信雄の本会議場での発言はさほど活発なものではなかった。何よりも発言回数が非常に少ない（四年間の任期中に議事録に記録された発言は二回）。同じ政友会から同期で市会議員となった弁護士水谷団治の華々しい活躍ぶりに比べるとその違いは歴然である。それと同時に、信雄の発言内容も慎重そのものであった。例えば、

○議長（中村嘉十君） 十九番ハ御発言ニナリマスカナリマセンカ。

○十九番（鈴木信雄君） 成ルベク後ニ願ヒタイデス、……実ハ市政ノコトニ就テハ極初步デ成ルベク多数ノ皆サンノ御質問ヲ伺ツテ自分ノ質問スベキコトガ無クナリマスレバ、遠慮シタイト云フコトデ後ニ廻シテ居ツタ次第デゴザイマス、オ尋ネシタイト考ヘテ居リマス点ガ沢山ニ在ツタノデゴザイマスガ、三日間ニ続キマスル熱心ナル多数ノ諸君ノ御質問ト御答弁トニ依リマシテ、非常ニ得ル所ガアツタノデゴザイマス、デ只ダ其ノ内ニ漏レタト思ハレル二、三ノ点ニ就マシテ、当局ニ御質問致シタイト思フモノデアリマス。

これは一九三〇（昭和五）年三月一五日市会本会議での発言である。まもなく市会議員在職一年を迎えようという時期での発言であるだけに、信雄の慎重さがよく現れているように思う。こうした慎重な態度の背景に何があったのか。それを

考える一つの手がかりとして本会議欠席率に注目したい。一九三〇（昭和五年）年の静岡市会本会議は、通算で四三日間開会した。このうち信雄が出席したのは二八日にとどまり、欠席率は約三五％であった。翌三一（昭和六）年になると、本会議開会日二五日間のうち、信雄が出席したのは一四日であり、欠席率は四四％に増加している。要するに、信雄は、本会議への出席もままならない状況に置かれていたといえそうである。そうした事情が、信雄の発言を慎重なものにしていたのではないだろうか。

おそらくそのことと関連すると思われるのが、弁護士業務の多忙化である。この時期、彼は数多くの重要事件を抱えていたようである。現在判明するだけでも、例えば刑事事件では、一九二九（昭和四年）年一〇月に静岡地方裁判所で貫い子殺人陪審裁判の官選弁護人を務め、社会の耳目を集めた。⁽³³⁾ 民事事件では、一九二八（昭和三年）、宮内大臣一本喜徳郎を相手取り東京控訴院に千頭御料林境界確認訴訟を提訴した（東京控訴院の判決言渡は一九三二年七月）。⁽³⁴⁾⁽³⁵⁾ このように弁護士としての活躍の場が広がっていくことが、静岡市会での政治活動に少なからぬ支障となっていたのではないかと思われる。

それでは、信雄の市会内での政治活動は具体的にどのようなものであったのか。一九二九（昭和四年）年四月当初の静岡市会の勢力分布を見ると、最大勢力・水曜会（定数三六名中一九名程度）⁽³⁶⁾ が多数の力を誇っていた。これに対し、前述のように、信雄の所属する政友会は九名、政友系二名、民政党五名、無産政党一名という状況であった。⁽³⁷⁾ こうした政治地図を念頭に置きながら、当選間もない信雄は、次のように発言している。すなわち、

市政と政党とは全然別に考へたいと云ふやうな立場から岳南少壮団長を辞職したのだ。多数の議員を擁して横暴をたくましふせんとするものこそ実に不都合と云はねばならない。自分は何処までも市民の為にまじめに進み市民の公僕として充分尽くして見たいと思ふ。⁽³⁸⁾

要するに、市政に政党の論理を持ち込むことに反対し、あくまで市民の公僕という立場を貫くことを優先させようというのであった。そして、この発言は、市会多数派の水曜会に向けられたものであると同時に、自ら所属する政友会に対しても発せられたものであったといえよう。それでは、実際に、信雄は自らの信念に忠実な議員活動を送ることができたのだろうか。いくつかの事例に即して検討してみよう。

第一に、当時の最重要課題の一つである安倍川市営発電所建設計画問題⁽³⁹⁾への対応について。一九二九(昭和四)年五月二日、信雄は市会で電気事業常設委員(定員四名)に推薦され、発電所建設問題に直接関与することになった。そして、翌三〇(昭和五)年五月二〇日、静岡市は発電所建設計画に必要な水利権の認可を取得し、事業費予算案の審議が開始されることになった(ただし、一月一九日までに市会が議決しなければ、認可は取り消されるという付帯条件付であった)。この事業費予算案は、まず信雄が所属する電気事業委員会に上程された(七月二六日)。当時の新聞を見ると、この計画をめぐってすでにさまざまな批判や疑念(建設計画地の地盤は地質が悪く崩壊の危険がある、発電所を建設するには安倍川の水量が不足している、等々)が出されていたようである。⁽⁴⁰⁾そうした世論を反映して、電気事業委員会の審議も混乱したようである。数回の審議を経て、八月二日、電気事業委員会は事業費予算を承認したが、そのときの議論状況は次のようなものであった。

静岡市の安倍川発電所設置問題審議の電気事業委員会は、前後数回開会したが、(八月)十二日も引続き開会した。席上磯野新蔵、鈴木信雄の両氏は、発電^(別紙不地)□□を安倍川に選んだに就て不安に考えられるから、斯界の権威者に依頼して調査研究の後更に審議したいと極力保留説を唱へたが、斯くては徒に時日を経過するからとの議論が多く、結局一切の議論は市会本会議に於てなす事とし、委員会は二名の反対を押し切つて原案を承認した。此重大案件は斯くて電気部委員会の手を離れ、近く土木委員会に付議した上、今月末若しくは来月上旬、市会本会議に上程される事となつたが、静岡市未曾有の重大案だけに今後の成行を一般は注視している。⁽⁴¹⁾

要するに、電気事業委員会は、専門家による調査研究が必要であるという立場からの「審議保留説」と本会議での審議に問題点の検討を委ねるという立場からの「審議促進説」とに二分され、信雄は磯野新蔵（水曜会）とともに保留説をとっていたのである。

この案件は、その後土木委員会の審議（一九三〇年八月）を経て、九月二十七日市会本会議に上程された。⁽⁴²⁾そして、一〇月一四日から市会での審議（第一読会）⁽⁴³⁾が開始された。そして、一〇月一八日には第二読会に入ったが、水利権の認可に付せられた期限一〇月一九日が近づいてきたため、一〇月一日、市会は許可期限延期を静岡県に願ひ出ることを決議した。⁽⁴⁵⁾その方針を実質的に決定したのは、前日に開催された全員協議会であった。しかし、県の否定的回答に接したため、市会は、同月七日、急遽質問を終了させ、⁽⁴⁶⁾同月一日には満場一致で事業費予算を可決・成立させた。⁽⁴⁷⁾しかし、残念ながら、この時期の信雄の動向には不明な点が多い。「静岡市会議事速記録」を見る限り、市会本会議では、この件について何も発言していない。同様に、全員協議会での発言を記した資料も見当たらない。ちなみに、事業費予算が上程された九月二十七日から予算案を可決した一〇月一日まで通算一六日にわたって本会議が開会されているが、信雄が出席したのは一〇日間のみであった（欠席したのは一〇月一八、二〇日、一月五、六、七、一二日の六日間）。⁽⁴⁸⁾

第二に、会派解消問題について。当時の静岡市会には、前述の安倍川市営発電所建設計画を初めとして重要案件が目白押しであった。それにもかかわらず、市会内部では各会派の対立が激化し、政治的な混迷を深めていた。例えば一九三〇（昭和五年）九月の小島源三郎市長の任期切れを睨み、後任市長問題をめぐって深刻な会派間対立が長期間続いた（宮崎通之助が後任市長に選出されたのは翌三二年二月一八日、宮崎による市長就任受諾は二月二十四日であった。また、同じ時期、これも当時の静岡市政の重要課題である上水道事業において、市の定めた規格を満たさない、いわゆる「不正鉄管」が大量に納入されていたという事実が発覚し、政治問題化した）。⁽⁴⁹⁾こうした政治的混迷を脱することを意図して、当時の静岡市会議長・中村嘉十

〔政友会〕は、一九三二(昭和七)年一月三〇日静岡市会全員協議会で、「市会各会派を解散し、市会議員全員で新たに「市政会」という統一会派を組織すべきである」という提案を行った⁽⁵⁰⁾(政党内各派が政友会派の解体と全会派の統一を主張するその論理は、一九四〇年以後の県会新体制運動のそれを思わせるものがある)⁽⁵¹⁾これに対し各会派は、二月六日の市会全員協議会の場でそれぞれ態度表明を行った。すなわち、

水曜会 「政友会派の解体は不可能なりと信じて、飽く迄従来通り結束して進むことに申合せた」。

政友会 「我々は議長の提議に賛成する。現在の如く、市政紛糾の際にはお互ひに当選直後の純な気持ちに立ち返って

進み、以て市政を円満に進行したい」。

民政党 賛成と反対の意見に分裂⁽⁵²⁾。

最大会派である水曜会の賛成が得られなければ、議長提案が実現する見込みはなかった。他方、中村議長の所属会派である政友会は、最終的に議長提案支持の方向で動いた。しかし、そこに至るまでには会派内かなりの異論があったようである。信雄も、水谷団治とともに、そうした異論を唱える一人であった。彼はこう述べている。「中村議長の提議の精神を汲んで、飽くまで存続せんとする水曜会を打破すべく努力しなければならない。議長は恐らく辞職するであろうが、その時我々は目標を水曜会に向け打倒に進みたい」⁽⁵³⁾。しかし信雄は、最終的には、政友会所属議員として一致した行動を選んだのである。

第三に、市会の外での政治活動について見てみよう。一九三二(昭和七)年二月二〇日は第一八回衆議院議員総選挙の投票日であった。その日に向けて、政友会支部組織では公認候補の絞り込みが行われた。政友会静岡市支部会は、同年一月二十九日に役員会を開催し、川島一松(幹事長)、水谷団治(総務)、中西惣三郎(総務)、石川庄太郎(総務)、鈴木豺ら二〇数名

が参集した。この場で候補者銓衡の協議が行われ、すでに出馬を決定していた山口忠五郎（元職、政友会静岡県支部支部長）、⁽⁵⁴⁾宮本雄一郎（新人、三〇年一〇月静岡県支部幹事長、深澤豊太郎（前職、三〇年一〇月静岡県支部総務）、松本君平（元職、静岡支部会支部長の四名の中から「静岡市に最も縁故が深い」との理由で松本を推すことを全会一致で決定し、党本部に公認幹旋方を要請した（しかし、結局、この要請は容れられなかった。⁽⁵⁵⁾）

しかし、信雄は、こうした動きに同調せず、独自行動を展開した。静岡市内には寺崎乙治郎系の政友会グループが結集する「静岡新政団」があり、信雄もこれに加わっていたからである。新政団のおもなメンバーは、寺崎乙治郎（新政団団長、政友会静岡支部会顧問）、天野克己（新政団副団長、静岡市支部会幹事）、野中兼（新政団副団長、松浦金作（新政団幹事長、静岡支部会幹事）、石上庄太郎（市会議員、静岡支部会総務）、服部勇吉（市会議員、静岡支部会総務）、そして鈴木信雄（三一年一〇月から県会議員と市会議員を兼職、静岡支部会総務）などであった。新政団は一月二五日に新年総会を開催し（八〇余名の団員が出席、独自候補の擁立について協議したところ、「此際団長寺崎乙治郎氏を推薦したい。氏は三十年間政界にあって活動し、地方的に功労少なからざるものがあり、氏の晩年を飾るべくどうしても衆議院に送らねばならぬ。（略）庶^{マツ}二無二擁立すべきである」という意見が有力であったという。そこで総会では、鈴木信雄、石上庄太郎ら一二名を選挙対策委員に選出し、具体的方針の協議を委ねた。その結果、静岡新政団としては、第一候補に寺崎乙治郎を推薦し、寺崎が立候補を受諾しない場合には深澤豊太郎と宮本雄一郎のいずれか一人を応援することを決定した。⁽⁵⁶⁾しかし、病氣療養中の寺崎は推薦の申し入れを受諾しなかった。その後の信雄らの行動は若干の迷走を示す。信雄らは、一月三十一日、突如静岡市長宮崎通之助を擁立する動きを見せたのである。しかし、即座に宮崎が固辞したため、彼らは深澤豊太郎を推薦するという方針に落ち着かざるをえなかった（二月四日新政団臨時総会）。

こうした一連の過程を見ると、政友会静岡支部会組織が主流派（松本君平、水谷団次、中西惣三郎、野中芳蔵、渡辺隆蔵、川島一松ら）と非主流派（寺崎乙治郎、鈴木信雄ら新政団グループ）とに分裂している状況を読み取ることができる。このうち新政団グループ

は、庶民金融機関「静岡信友会」を有力な活動拠点にしていたという点が注目される。信友会は、一九二九(昭和四)年一月創立以後、急速に加入者を増やし、一九三二(昭和七)年現在で会員口数六〇〇〇口、契約高五四万円、落札貸付高一八万円、満期支払高七万八〇〇〇円に上っていた。信友会の組織構成は、左の通りである。

主 幹 寺崎乙治郎(静岡新政団団長、政友会静岡支部会顧問)

相談役 江川勝太郎 小長谷勝之助 黒柳芳蔵

事務長 松浦金作(静岡新政団幹事長、政友会静岡支部会幹事)

この他に従業員が二〇数名従事し、さらに法律顧問として鈴木信雄、山田豊、望月義憲の三弁護士が関わっていた。⁽⁵⁸⁾ 新政団グループは、寺崎乙治郎を中心に政治的にも経済的にも結合する勢力であった。⁽⁵⁹⁾

以上、要するに、静岡市会議員鈴木信雄は静岡市の政友会組織の中では寺崎乙治郎系グループ(静岡新政団)に属し非主流派的な位置にあったことは確認したが、それ意外に特徴的な政治活動を見出すのはたいへん困難である。ただ、静岡市政の発展期に際会し混迷を極める市会の中で信雄のとった行動は、大筋で政友会という政党の枠組みから逸脱するものではなかったといえるだろう。信雄の政治家としての存在感がより明確に示され、政治的な自己主張が強力に押し出されることになるのは、一九三一年(昭和六)年一〇月以後の県会議員としての活動においてであった。そこで次章では、静岡県会での活動を具体的に追跡することにした。

(1) 前掲『語る』二六頁。

(2) 『静岡民友新聞』一九二三年三月三一日付。

(3) 一九二四(大正一三)年一月、清浦内閣の下で政友会が分裂し、政府を支持する床次竹次郎が政友本党を作り、既存の政友会は野党の立場に転じた。こうした中央政界の動向を受けて、同年二月、政友会静岡県支部は総会を開き、政友本党に走る者と政友会に残る者に分裂することになった。その結果、松浦五兵衛、寺崎乙次郎、山口忠五郎、宮本雄一郎、大橋亦兵衛らは政友本党に入党し、小泉策太郎、岩崎勲、池田猪三次らは政友会に残留した。ここで問題になったのは、従来松浦五兵衛が社長として新聞を発行していた静岡新報社の所有権であった。

松浦は、政友会脱党とともに、静岡新報を政友本党の機関新聞として発行するとの声明を発した。しかし、当時同社は資本金二〇万円の合資会社であり、その社員九名(無限責任社員四名、有限責任社員五名)は政友本党側五名、政友会側四名に分裂していた。そのため、松浦の声明が出るあ、政友会側は直ちに反撃に出た。彼らは、「合資会社の経営は無限責任社員の多数決による」との原則を主張して、政友会側の無限責任社員三名が無限責任社員の一人である松浦五兵衛社長を多数決で解任して新社長を選任するとともに、政友会の院外団壮士七〇名余りで静岡新報社を抑えてしまった。

こうした事態に際し、鈴木信雄はひそかに無限責任社員(影山滋樹)を原告名義人として、静岡新報社長松浦五兵衛を相手取り「合資会社静岡新報社の解散」を求める訴訟を静岡地方裁判所に提起した。裁判所は、僅か一回の口頭弁論を開いただけで、この訴をあっさりと認めてくれた。そこで信雄は、松浦五兵衛の腹心で静岡新報社の会計係を務めていた人物を清算人に選任してもらい、その清算人から旧静岡新報社の有する社屋、工場、機械、器具、新聞発行権の一切を、新しく設立した合資会社(社員は松浦五兵衛、宮本雄一郎、江川勝太郎、鈴木信雄の四人)に譲渡させ、再び松浦五兵衛の下に静岡新報の発行を継承したのである。この一連の事件を「静岡新報社事件」と呼んでいる。この静岡新報社事件については、鈴木信雄『裁判あれこれ』(鈴木信雄、一九五七年)八九、九七頁、前掲『語る』一七、一九頁、参照。

(4) 前掲『五〇年』三七頁。

(5) 前掲『語る』三四頁。

(6) 前掲『語る』三六、三七頁。

(7) 『静岡新報』一九二九年六月一日付。

(8) 『静岡新報』一九二九年四月一八日付。なお、団長退任後、信雄は、静岡岳南少壮団の顧問に就任している(『静岡新報』一九三〇年四月一八日付)。

(9) 前掲『静岡県史』通史編六・近現代二、三八頁。

(10) 『静岡民友新聞』一九二五年二月二日付。

(11) 『静岡民友新聞』一九二六年四月一六日付、一九日付。

(12) 『静岡民友新聞』一九二六年四月二八日付。なお正式に支部が創立されたのは一九三二(昭和七)年一月である(『静岡県史』通史編六・近代二、三八頁)。

(13) 『静岡民友新聞』一九二六年六月六日付。

(14) 『静岡民友新聞』一九二六年六月三〇日付。

(15) 『静岡民友新聞』一九二六年四月一六日付。

(16) 塩原時三郎は、一八九六(明治二九)年六月、長野県東筑摩郡朝日村八五〇番地に生まれる。第八高等学校卒業後、東京帝大法科に学び、一九二〇(大正九)年卒業。通信省電気局に入り、二三年同省貯木局賜金課長、二四年一月静岡郵便局長、その後通信省簡易保険局に移る。のち川村台湾総督に迎えられ、台湾総督府参事を務める。一九二九(昭和四)年清水市長、三二年関東庁長官秘書、三五年満州国人事処長、三六年朝鮮総督府学務局長、四一年厚生省職業局長、四二年電気庁長官、四四年通信院総裁、退官後弁護士となる。静岡県第一区から総選挙に出馬、五三年当選。極東軍事裁判(東京裁判)で被告弁護人を務めたことでも知られている。

(前掲『語る』四六頁、『静岡新報』昭和四年五月三〇日付、朝日新聞東京裁判記者団『東京裁判』上、朝日新聞社、一九九五年、三五頁)

(17) 前掲『語る』三七～三九頁。

(18) 日本労働組合評議会所属の浜松合同労働組合に加入する日本楽器職工二二〇〇名余りは、一九二六(大正一五)年四月二一日、会社に対して待遇改善を要求するも、会社側の全面拒否にあったため、四月二六日、同盟罷業決行を決議した。その後の労使間の闘争は激烈を極め、長期化した。両者の間に最終的な調停が成立したのは八月八日のことであった(『静岡民友新聞』一九二六年八月九日付)。なお、日本楽器争議については、特に前掲『静岡県史』通史編五・近現代一、九一二頁以下参照。

(19) 前掲『静岡県弁護士会史』四一～四二頁。

(20) 自由法曹団編『自由法曹団物語』労働旬報社、一九六六年、三九〇頁、参照。

(21) 『静岡民友新聞』一九二六年六月一二日付が「其筋の注意により／争議関係宣伝ビラの中止で／印刷業者の青息」と報じていることから推して、信雄の宣伝ビラ配布活動は六月頃のことではなかったかと思われる。

(22) 静岡県内における国本社活動の全容について語ることはできないが、昭和期に入っても支部活動は続けられたのは確かである。例えば、一九二九(昭和四)年の地元新聞は、「最近(国本社静岡支部——引用者)支部長三家重三郎氏、幹事諏訪部一之輔氏は県当局と打合せ、国本主義の鼓吹と思想国難の覚醒を与ふる為め、市内の中等学校にて講演を為すべく第一着に男女師範学校及静岡技芸学校等にて両氏の講演があった」(『静岡新報』一九二九年二月八日付)ことを報じている。また、一九三一(昭和六)年六月六日には、国本社静岡支部主催で、平沼騏一郎(当時枢密院副議長)、山内静男(築城本部長陸軍中将)、岩村通世(東京控訴院検事)、諏訪部一之輔(静岡支部幹事)らを講師とする講演会が開催された(『静岡新報』一九三二年六月五日付)。

(23) 村本喜代作によれば、「吉川は一種非凡の風格を持った実業家で、大正十一年市會議員に推され、一級の最高点で当選した人望家だったが、岡崎弁護士とは意気投合して、非常に親しい間柄だった。そして又、鈴木父伝七とは製茶共同組合の事業で知り合って以来、

これも懇意の中だったので、鈴木も吉川はよく知っていた(「前掲『語る』五〇頁」という。しかし、実際には、村本が語る以上に吉川と信雄との間には深い関係があった。すなわち、吉川は茶業取締規則(一九一一年農商務省令第二〇号)違反事件で起訴され、一九二二(大正一一)年七月、静岡区裁判所で有罪判決(罰金八〇円)を受けた。吉川はこれを不服として静岡地方裁判所に控訴したが、この控訴審で吉川の弁護士を務めたのが鈴木信雄であった(外に鶴澤、岡崎両弁護士)。しかし、控訴審でも原審と同じく有罪判決が下されたため、吉川はさらに上告した。そしてついに、一九二四(大正二三)年二月、大審院で無罪判決を獲得したのである。

(『静岡民友新聞』一九二四年二月一日付)

24 前掲『語る』五〇～五一頁。

25 『静岡民友新聞』一九二九年三月二二日付。

26 『静岡民友新聞』一九二九年四月五日付は、次のように報じている。「各候補者の運動方法論陣筆戦は入乱れて、遂に最後の締切日の昨四日まで一般に予想された三人の人たちも打って出でず、最後の水谷団治氏を以て六十四名と決した。愈茲一週間の間に三十六名の定数に十三万市民の輿望が分たれんとする瀬戸際で、六日間の白熱化こそ興味を中心でなければならぬ。因に立候補者を色分けをすると、民政九名、政友十五名、民系中立十一名、政系中立四名、中立二十二名、実同二名、無産一名となる。」

27 『静岡新報』一九二九年三月二九日付。

28 『静岡民友新聞』一九二九年五月三日付。

29 新しく選出された議員の顔ぶれは以下の通りである。

	1	2	3
当選者名	田中太次郎	松田 辰雄	松坂 徳重
票 数	八五二	六二八	五七八
党派	準政	無産	中立
新旧	新	新	新

	19	20	21
当選者名	笠原源五郎	川島 一松	服部 勇吉
票 数	三七七	三六八	三五七
党派	中立	政友	政友
新旧	新	新	新

18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4
中野 龍彦	中村 嘉十	望月 由蔵	根本 昇	望月 七平	渡辺 隆蔵	山田 順策	鈴木 信雄	堀 八郎	小長井誠蔵	伏見 忠七	石上庄太郎	中田 駿郎	岩崎 五郎	望月 政吉
三七九	三八二	四〇一	四二五	四二九	四四〇	四四四	四五〇	四五〇	四五八	四八三	四八八	五〇一	五三七	五七六
中立	政友	中立	政友	中立	民政	民政	政友	中立	中立	中立	政友	中立	民政	中立
新	再	新	新	新	新	再	新	新	新	再	新	元	新	新

36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22
中村 藤吉	寺川 竹蔵	多々良 玄	増田 栄作	杉山 友作	高杉啓次郎	酒井嘉右衛門	磯野 新蔵	中尾栄次郎	小林 正幸	出島甚太郎	小杉 潔	水谷 団治	臼井喜市郎	紅林 源作
二六〇	二七〇	二七九	二九六	二九八	三〇二	三〇七	三一九	三二五	三三七	三三九	三四五	三五五	三五六	三五七
政友	中立	中立	中立	中立	中立	中立	中立	民政	準政	民政	中立	政友	中立	政友
再	新	再	再	新	新	新	新	再	再	新	再	新	新	新

(注)『静岡新報』一九二九年四月一三日付より作成。

(30)『静岡新報』一九二九年二月一〇日付。

(31)『静岡新報』一九三一年三月八日付。

(32)静岡市役所編『静岡市史』総目次・年表・索引(静岡市役所、一九八二年)九〇六頁以下。

弁護士鈴木信雄と近代地域社会(3)

83 前掲・利谷信義「貫い子殺人陪審裁判」参照。

84 『静岡民友新聞』一九二八年七月一八日付は、この事件を次のように報じている。「千古斧鉞を入れざる大井川奥地の御料林と民有林との間に最近新しい境界繫争問題が惹起した。事件の発端は明治三十年の古きに遡り、当時御料局は境界と見做される地点に杭を打ちその儘となつてゐたが、最近になって民有林側では不図したことからその誤れるを知り、これまで数回宮内省に向かつて陳情を試みたが、宮内省側としては一旦決定したる境界はこと御料林に關すること、て枢密院の諮問を経なくては如何ともすることが出来ない。而してその前提としては裁判所の確定判決を要するとのもとに取合はないので、民有林側より静岡^{東海}地方裁判所^{第二}に提起するに至つたものであるが、右に就て上川根及井川両村に現存する古記録を辿る時は明かに御料局側の民有林側進出であり、而も古い境界地点と思はるゝ所の自然石に「州」の一字が刻されてゐる。しかし尚ほ明かな証拠を得んとして弁護士静岡市下桶屋町鈴木信雄氏は昨十七日午後県立藝文庫に貞松館長を訪問して古い地図はないかと云つて来たが、元来山の記録としては封建時代は極めて曖昧なるもので、元禄の頃まで山に對する課税すらなかったやうな事実^に鑑み山の古記録等に就いてはたぐるべき糸の端緒すらない。随つて貞松氏も何ら答ふる處なかつたが、鈴木弁護士は近く現場の实地踏査に赴く筈で、事件の進展は極めて興味ある問題である。」

その後、一九三一(昭和六)年七月、東京控訴院は請求棄却の判決を下した。なお、この訴訟については、肥田正巳氏(静岡県近代史研究会)から多くのご教示を得た。記してお礼を申し上げたい。

85 この他、新聞報道されたものだけでも、鈴木信雄が訴訟代理人として関わつた事件には次のようなものがあつた。【一九二八年】六月(離婚請求訴訟提起)、一一月(離婚請求訴訟取り下げ)、【一九二九年】六月(見附署拷問事件再審請求申立)、一一月(見附署拷問事件再審公判開始、無罪判決言ひ渡し)、【一九三〇年】三月(詐欺罪事件無罪判決言ひ渡し、約束手形支払請求訴訟提起、登記無効確認訴訟準備手続)、一〇月(認知請求訴訟公判)、一一月(遺産引渡請求訴訟提起)、【一九三一年】二月(家督相続人廃除請求訴訟提起)、六月(弁償請求訴訟提起) などがある。

86 政友会系の地元新聞『静岡新報』は、水曜会を「財閥派」「財閥系」と攻撃した。

67) 『静岡民友新聞』一九二九年四月一三日付。なお、一九三一（昭和六）年五月現在の会派構成は次の通りである。一進会（水曜会

解体後の新会派）一名、政友会八名、政友系三名、民政党七名、清明会四名、無所属三名。（『静岡新報』一九三二年五月二日付）

68) 『静岡民友新聞』一九二九年四月一八日付。

69) 『静岡新報』一九三〇年七月二七日付の新聞記事は、同事業計画について、次のように説明している。

「二十六日の電気事業委員会に提出された静岡市営発電所計画案は、第一期事業四百四十三万円、第二期事業百五十三万九千四百円にて安倍川上流の梅ヶ島、大河内西村内に四ヶ所の発電所を建設せんとするもので、この年度の支出額は、

第一期発電計画年度割支出

五年 三四〇、〇〇〇円

六年 九二〇、〇〇〇円

七年 一、三六〇、〇〇〇円

八年 一、〇三〇、〇〇〇円

九年 七八〇、〇〇〇円

計 四、四三〇、〇〇〇円

第二期発電計画年度割支出

九年 七〇、〇〇〇

一〇年 七六五、〇〇〇

一一年 七一〇、〇〇〇

合計 一、五四五、〇〇〇円

で之等の財源は殆ど全部を電気事業繰入金にて支弁し、僅少額を事業遂行によって生じる物品の売却等より生ずる雑収入を繰入るゝもので、起債等はビタ一文もやらない処に市の発電計画の誇りがあるのであって、第一期事業としては四百四十三万円を以て第一発電所（横山）、第二発電所（坂本）の二発電の建設をなし、第二計画にて第三発電所、第四発電所二発電所を百五十四万五千円にて前期の年度割にて遂行するもので、市では本市営発電所会計は五年度より特別会計を設定して施行し、之と共に市条例の改正を行い、職制其他を定め、部長一年二千七百円級の技師四、主事一、其の内書記、書記補、技手補若干名を置いて事業を遂行する事となった」

(40) 『静岡新報』一九三〇年八月二日付、三日付は、静岡市営発電所問題の特集記事を連載している。その中で、発電所建設計画に対する疑問ないし批判として安倍川の水量問題と建設計画地の地盤問題を取り上げ、当局の回答を求めている。

(41) 『静岡新報』一九三〇年八月三日付。

(42) 『静岡新報』一九三〇年九月二八日付。

(43) 『静岡新報』一九三〇年一〇月一四日付。

(44) 『静岡新報』一九三〇年一〇月一九日付。

(45) 『静岡新報』一九三〇年十一月一日付。

(46) 『静岡新報』一九三〇年十一月八日付。

(47) 『静岡新報』一九三〇年十一月二二日付。

(48) 『静岡市会議事速記録』による。なお、安倍川市営発電所建設計画のその後の推移を左に簡単に整理しておこう(おもに『静岡市史』総目次・年表・索引、による)。

一九三〇年十一月一日 静岡市会、事業費予算案を可決。

二月二日 静岡市会、発電所比較調査委員を選任。

一九三一年 八月一七日 静岡市会、発電所比較委員会を解散。

九月三日 静岡市会、電源調査費を可決。

九月 発電所問題をめぐり市民大会が開催される。

一九三三年 六月二日 静岡市、芝川発電所を東京電灯から三七三万円で買収。

一九三四年 八月六日 静岡市会、安倍川発電所水利権出願の件決議。

一九三六年 九月三〇日 静岡市、安倍川市営発電所認可申請。

一九四一年 二月一七日 静岡市会、市営電気事業の中部電力への統合を決議。

一九四二年 四月 一日 静岡市営電気事業、中部配電に統合される。

(49) 『静岡新報』一九三〇年八月一四日付。

(50) 『静岡新報』一九三一年一月三一日付。

(51) 前掲『静岡県史』通史編六・近現代二、二〇一頁。

(52) 『静岡新報』一九三一年二月六日付。

(53) 『静岡新報』一九三一年二月三日付。

(54) 青島鋼太郎編『志太地区人物誌』青島鋼太郎、一九五七年、二六〇頁。

(55) 前掲『静岡県史』通史編六・近現代二、二三頁。

(56) 『静岡新報』一九三二年一月二七日付、同月三〇日付。

(57) この時の総会の模様を当時の新聞は次のように報じている（『静岡新報』一九三二年二月五日付）。

「静岡市政友会有志及び新政団の衆議院議員候補者推薦大会は既報の通り、四日午後一時から、市内七間町一丁目入道館に於て開催。出席者三百余名に上り、松浦金作氏の開会の辞があつて後、天野克己氏から主唱者としての一場の挨拶があり、直ちに県會議員鈴木信雄氏を座長に推して立候補者銓衡協議に入り、杉山広氏の動議で銓衡委員を選定する事に決定。鈴木座長の氏名で大橋甲一氏外二十四名を挙げ、右委員は別室において委員長に奥村重吉氏を推し、協議の結果、深澤豊太郎氏を推薦する事に決定した。然して深澤氏に交渉し快諾を得たので、此の交渉経過を奥村委員長から報告があり、終つて在京寺崎乙治郎氏からの御盛会を祝す。一致協力して、深澤氏に栄冠を与へられん事を切望す。寺崎乙治郎

・電文披露があつて後、深澤氏が登壇して一場の挨拶があつた。更に來賓代表として清水市鈴木与平氏の祝辞演説があり、午後三時半盛況裡に閉会した。」

68 『静岡新報』一九三二年二月一日付。

69 鈴木信雄と寺崎乙治郎との強い繋がりは、信雄が寺崎の後継者として県会議員選挙に立候補した事実にも示されている。前掲『語る』五二頁以下。